

第5回多文化社会実践研究 フォーラム報告書

多文化社会における専門職を問う
私はこの10年、何をしてきたか？
私たちはこれからの10年、何をしていくのか？



一般社団法人 多文化社会専門職機構 TaSSK

第5回多文化社会実践研究フォーラム 実施内容

開催日時 2021年12月4日(土)13時~16時30分

参加者数 80名

<総合司会>

長尾晴香さん(TaSSK 運営委員)

1 パネルトーク「多文化社会と専門職としての私」(60分)

<パネリスト>

勝部麗子さん(豊中市社会福祉協議会 コミュニティソーシャルワーカー)

山岸素子さん(移住者と連帯する全国ネットワーク 事務局長)

関聡介さん(弁護士、TaSSK 監事)

山西優二さん(早稲田大学教授、TaSSK 理事)

<司会>

奈良雅美(TaSSK 理事)

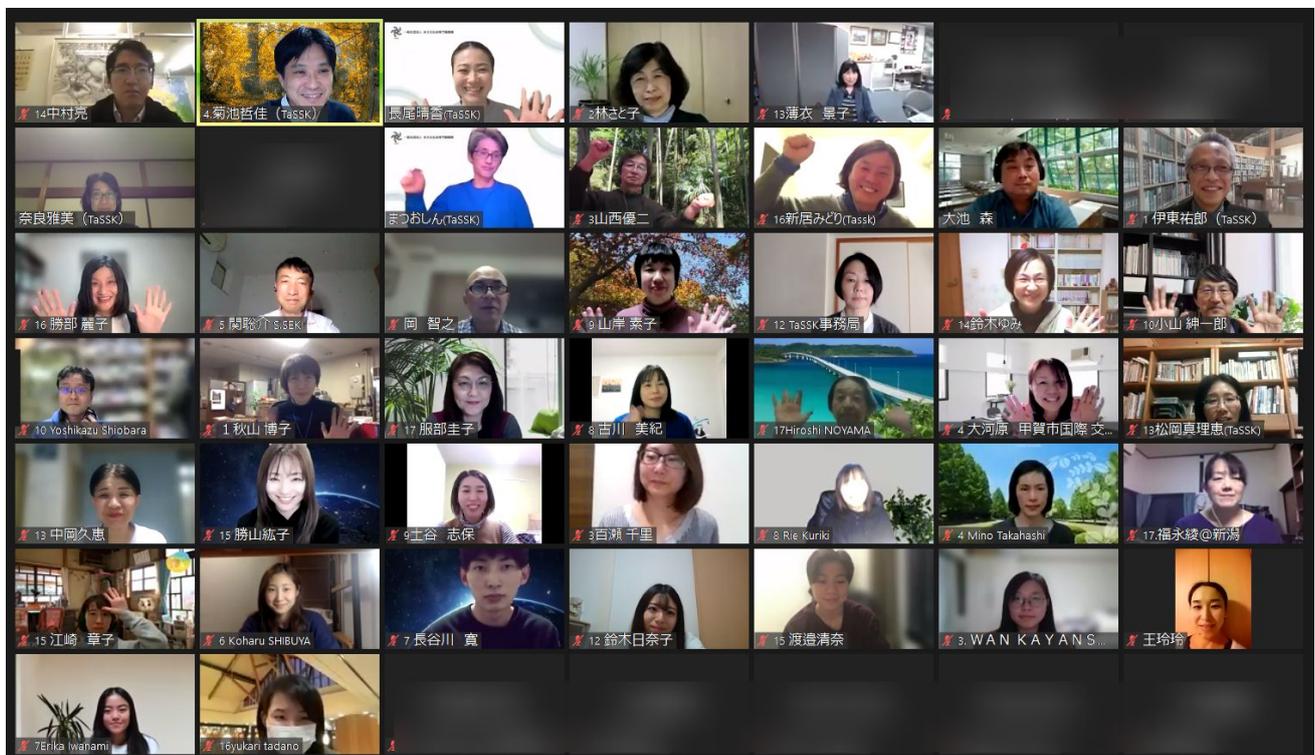
2 ワールドカフェ「私の実践から見る多文化社会」(90分)

<ファシリテーター>松尾慎さん(TaSSK 運営委員、東京女子大学教員、VEC 代表理事)

3 ふりかえり(20分)

<司会>

奈良雅美(TaSSK 理事)



開催のねらい

多文化社会専門職機構では、2018年から3年にわたり、多文化社会実践研究フォーラムにおいて「多文化社会における市民活動と専門職」を中期的テーマに据え、議論を深めてきました。

第1回は「多文化社会を問う」、第2回は「多文化社会における市民活動を問う」、そして今回はその締めくくりとして「多文化社会における専門職を問う」をテーマとしました。

近年、多文化社会を取り巻く状況は目まぐるしく変化しています。その中で「私」のこれまでの実践を振り返ると、着実にその歩みを進める一方で、依然として打開できない問題もあります。

このフォーラムでは、これまでの「私」の10年を振り返るとともに、「私たち」でこれからの10年を展望し、多文化社会における専門職の役割について考えたいと企画しました。

当機構では、専門職として多文化社会コーディネーターと相談通訳の専門性認定事業を行なっていますが、その2つの枠にとどまらず、多文化社会の問題解決を通じて多文化共生社会の実現に貢献する専門的立場、職にある人を広く専門職としています。

パネルトーク「多文化社会と専門職としての私」

これまでの2回のフォーラムにおいて、福祉、教育、法律、医療、労働の分野での議論を積み重ねてきました。

パネリストの関さんは法律の分野の、山西さんは教育の分野に基本的に立っていますが、領域にとどまらず広く多文化社会とそこに関わる人、専門職のありようをつぶさに見てきました。フォーラムでの2年間の議論の中で見えてきた課題を整理しつつ、二人はこれまでのTaSSKおよび市民社会の取り組みについて成果と課題についてお話しいただきました。また、山岸さんには、多文化社会、おもに外国人支援の分野を牽引する移住連において、多様な人々の思いと力をどのようにまとめ推進してきたか、そこに専門家としての立ち位置をどのように見てきたかについて、勝部さんには、コミュニティソーシャルワーカーとしての長年の実践の中から、多様な人々と共に地域をつくる上で専門職としてどのような視点をもっていたか、またこの10年でどのような変化があったのかについてお話しいただきました。

トーク全体を通して、パネリストの方には専門職の取り組みによって社会を変えていけるのか、また専門職の重要性、意義についてお話しいただき、次のワールドカフェでの参加者の議論につなげました。

ワールドカフェ「私の実践から見る多文化社会」

多様な分野、領域で活動する人々、専門職だけではなくこれから目指したい学生や若い世代の人々が、共に自らのこれまでの実践をベースにしつつ、パネルトークで出てきた論点をテーマに語りあいました。2回テーブルを変えた後、3回目はもとのグループで共有しこれからの10年(未来)の多文化社会を作るために関わるべき人、その役割について展望しました。

ふりかえり「私たちは多文化社会をどう描くか」

ワールドカフェで出された意見を紹介しながら、パネルトークのパネリストから改めてこれからの多文化社会と専門職、人材、という視点でコメントを出していただきました。外国人市民とともに社会をどのように作っていくのか、社会をつなぐためにはそこに関わる人、専門職の存在が欠かせないとTaSSKは考えていますが、これからの10年、多文化社会の未来を描くために必要なことを、社会そして実践者としての私たち自身に投げかけました。そしてこの議論を次のステージのフォーラム、およびTaSSKの活動に反映したいと考えました。

パネルトーク「豊中社会福祉協議会のCSWと生活困窮者自立支援とくみ」 勝部麗子さん (パネリスト)

「地域共生社会への新たなステージ」

- 2004年から豊中市社会福祉協議会の地域福祉計画にコミュニティソーシャルワーカー(CSW)が位置づけられた。
- CSWはアウトリーチで地域に出かけていき、個別支援を通して社会の仕組みづくりを行う。
- 令和元年から外国人と福祉の連携プロジェクトがスタート。国際交流協会と社会福祉協議会が連携し、市内在住外国人の生活実態調査に同行して外国人住民の聞き取りを行った。
- 新型コロナウイルス感染症の拡大により減収して経済的支援を求める外国人が増加。社協の特例貸付の相談が増えたが、多言語で制度紹介パンフレットを作成した。
- 外国人向けコロナなんでも相談会を、社協・市・国際交流センターで共催。生活相談と食材支援。
- 令和3年度の取り組みとして、新たな交流の場づくりを行っている。
- 一つは「豊中めぐりパーク」として菜園で野菜収穫体験を行った。
- もう一つは食材支援の継続。夜間中学校の学生さんや技能実習生に支援。技能実習生については、「フットサル交流会」を開催することで、まず人間関係をつくり、そこから相談を持ち掛けられる関係となって相談してもらう。
- 今後「おとな食堂」を開催予定。国際交流協会の協力で作やすい日本語版のちらし作成。技能実習生にも広報。
- 個別支援ケースプロジェクト開始から連携も増え、外国人からの相談数がかなり増えている。
- 「外国人が暮らしやすい豊中市にするためのアンケート調査」(令和3年度)を市・とよなか国際交流協会との共同事業として実施。
- SOSを出せない人に届く支援、社会的孤立に対応するように。「一人もとりこぼさない」を目指す。

これからの専門職としての自身の展望：何をやっていきたいか

人間関係のないよく知らない人や機関から「相談してください」と言われても相談できない。まずは顔の見える人間関係を作れる輪をたくさんつくり、そこから「あなただから、ちょっと相談する」という形で相談をしてもらい、そこから個別相談を受けていく。そういう場をたくさん作っていく。

社会資源開発としてフードバンク・フードドライブの仕組みを構築し、支援できる仕組みを継続する。人間関係づくりと社会資源開発を両輪に、「すべての人に居場所と役割を」つくることを目指して活動していく。

「移民/外国人支援ネットワーク NPO の経験から」

- 「政策提言」「情報発信」「ネットワーク」が活動の柱である移住連の組織説明
- 定住する外国人は 300 万人を超えるが、日本の移民政策の基本はこの 30 年変わっていない
- ネットワークによる政策提言によって細かい部分の変更はできたが、大きな政策変換にはならなかった
- 新しい動き① 問題と行動の可視化への取り組みによって入管改定案を廃案に
- 新しい動き② 「コロナ移民・難民緊急支援金」でネットワークを生かした直接支援を実施
- 民間の連帯による活動が社会・当事者に伝わっているという希望を感じた
- 公助と共助を両輪で取り組むことが大切

この 10 年を振り返って： 成果・変化・課題

ネットワーク組織としての移住連として情報発信・政策提言などの活動をしてきた。移民/外国人の数は増加し、定住化、高齢化に伴って活動のすそ野も広がり、多様化している。しかし、権利保障や支援のための基本法がないなど 30 年間日本の移民外国人政策は進んでいない。市民運動による活動も力不足で、根本からは変えることができなかった。

しかし、新しい動きも生まれている。それは、2021 年の入管法改定案の廃案への活動である。国会前行動や SNS、署名など一般市民の声が見える化したり、著名人や専門職などによる声明なども出さたりして、問題や行動を可視化することができ、新たな動きにつなげることができた。

もう一つの新しい取り組みとして、コロナ禍における活動として、「コロナ移民・難民緊急支援金」として、助成金や市民から 5000 万円を集めて、1645 人に支援者を通して直接給付することができた。この活動を通して見えてきた生活困窮状況や医療の現状を国会議員などにも説明することができた。

また、日本において生存が脅かされている人々から、この支援をもらって、自分たちが社会から存在を忘れられていないことが嬉しかったというメッセージをもらった。これは、公的な支援がないという絶望だけではなく、民間による連帯の力は伝わっているという希望も感じた。公助の政策提言を求めつつ、民間による共助を作り出す運動も重要で、両輪で取り組むことが大事である。

外国人との共生にむけて求められているのは、人権保障のための法制定とともに、自治体による多文化共生施策が展開されること、そして、地域における市民の取り組みが進められることである。

これからの専門職としての自身の展望： 何をやっていきたいか

移住連は政策を変えることを求めてロビーイングをしてきたが、国会議員や政党に向かっていてもなかなか変化は難しい。なぜなら、その人たちは世の中の支持がないと政策にしていけないからである。それに気づき始めて、移住連としては普通の人びとの共感を広げていくこと、市民社会への共感を広げていくことがセットで重要と考えて、5 年前くらいからそれに気づき活動をしてきた。

また、運動の中で足りていないことは、当事者の参画、外国人当事者の人が声を上げていくことである。脆弱な状況下にいる外国人当事者が声を上げることは難しく、リスクもあるが、言いたいことはいっぱいある人も多い。当事者の人が発する言葉が、力をもって響いていっている。活動に当事者の人に参画してもらうための働きかけが今後ますます重要だと考えている。学校現場、相談現場などにも当事者の教員や相談員なども含めて、当事者が日本人と差別なく、同等の情報をもって活動できることが多文化社会において大切だと考えている。

「外国人事件の動向と弁護士の対応体制」

- リーガルサービスの受け手＝「外国人」の数は、ほぼ一貫して増加。中長期在留者のほかに、非正規滞在者も存在し、合計 300 万人以上に上る。減少局面に入っている日本人人口とは対照的である。
- 人数が増えているとはいえ、「外国人」の地位は、マクリーン判決(1978)以来変わっていない。基本法は制定されず、「在留制度のわく内」でしか人権保障が及ばないという状況が続いている。
- 他方、リーガルサービスの担い手＝「弁護士」の登録数は急増中。司法改革の結果、筆者が登録した 1993 年の 1.4 万人から、直近で 4.2 万人へと 3 倍増。なお、"ベビーブーム"が続く。
- 弁護士から見て、外国人事件は、入管手続との絡み、準拠法・管轄、言語的ギャップ(通訳・翻訳)、制度的ギャップなどが要因になって、敬遠されがちな分野である。
- しかし、上述の登録数(特に若手)増加や弁護士会の対応体制強化(研修や情報交換の場の充実、マニュアル書籍の出版等)により、増加を続ける「外国人」リーガルサービスのニーズには、それなりに対応できつつある。

この 10 年を振り返って： 成果・変化・課題

日弁連や各地の弁護士会において、外国人事件への対応体制強化への取組みが続いている。2019 年度以降の外国人労働者受入れの「総合的対応策」と各地のワンストップセンター設置に呼応して、弁護士としても、リーガルアクセスの機会が増えるように工夫を続け、他の団体等とも連携を試みている。

また、外国人事件に取り組む弁護士の任意団体「LNF(外国人ローヤリングネットワーク)」も、全国各地に合計 1600 人以上の会員弁護士を擁するまでに成長しており、個々の弁護士や各地の弁護士会の対応力も強化されつつある。

他方、前述の「マクリーン判決」体制が 40 年間以上も続き、外国人については管理法ばかりが強化されてきた状況は、直近の 10 年間においても打破できていない。この点の克服なくして、本質的な事態改善は図られないものというべきであり、なお大きな課題として残っている。

これからの専門職としての自身の展望： 何をやっていきたいか

弁護士として、弁護士にしかできない専門的な分野を深掘りし、対応力を強化することが大切である。同時に、今回のフォーラムのように、他の専門分野の方々と交流して常に意識的に視野を拓げることも、また大切である。

このような観点で地道に活動を続けたいが、活動を長く続けるためには「頑張りすぎない」ことも大事であろう。引き続き、頑張りすぎないように頑張りたい。

今後 10 年の TaSSK の役割として見えたこと

TaSSK において専門職と言え、認定試験を実施している「相談通訳者」と「多文化社会コーディネーター」がまずは思い浮かぶが、今回のフォーラムのように、様々な分野の専門職が交わり合っそこから「何か」を常に見出し、生み出す「場」としての役割も、重要であると再認識しました。

パネルトーク「多文化社会と専門職としての私」 山西優二さん(パネリスト)

「多文化社会が示す多様性への対応を担う専門職のあり方」

これまでの10年間をふりかえると、「多文化社会が示す多様性への対応を担う専門職のあり方」として以下の3つの点が浮かびあがる。

- 既存の枠をずらし、新たな課題を設定すること
- 実践が「公」そして「私」へ偏りがちな中で、「共」を通して参加への多様な選択肢を生み出していくこと
- 目の前の問題・危機を直視しつつ、多文化社会・共生社会をよりダイナミックに想像すること

この10年を振り返って：成果・変化・課題

<東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター>

- * 2006年4月東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターの設立に伴う「協働実践研究」の始動
- * 2007年度～2015年度：多文化社会コーディネーターに関する協働研究の実施
cf. 専門性形成に向けての視点の提示：「ずらし」「妄想」「雑学」「省察」「省察的实践の場」

<多文化社会専門職機構>

- * 2017年2月「多文化社会専門職機構」の誕生
- * 多文化社会実践研究フォーラムの過去2回の教育分科会で示された「多文化社会における教育課題」
 - ① 人間と内外にみる多様なことば・文化の関連を問う教育のあり方、
 - ② ことば・文化にみる「同化性」と「創造性」の関連を問う教育のあり方、
 - ③ 「認知/社会的情動/行為・行動」を関連づける教育のあり方、
 - ④ 未来イメージを共有し、未来想像性を育む教育のあり方、
 - ⑤ 「教えること」「教えないこと」と「学ぶこと」の関連を問う教育のあり方、

↓

<「教育課題の探究に向けての多文化社会における市民活動」の課題>

「公的な枠組みへの偏りを変え、市民が「共」を通して多様性をつくり出し、当たり前が多文化の中にいる誰でもが参加できる社会基盤を構築していくこと」

これからの専門職としての自身の展望：何をやっていきたいか

これからの10年+αを想像すると、上記に示した専門職のあり方としての3点をさらに深めつつ、これらに加え、「多様性への対応」とは異なるより本質的な所で、人の痛みや喜びを共にし、人と人をつなげていく「優しさ」(compassion)・「優しさの文化」を生み出していくために、これを専門性の基底に据え、実践を通して共有していくことが重要であると感じている。

今後10年のTaSSKの役割として見えたこと

TaSSKとして、専門職の形成に向けての実践と研究を、上記の3点を踏まえて、さらに発展させていくことが求められるだろう。そしてそのためにも、実践研究フォーラムのような多くの関係者が集える場を大切にしつつ、身近な実践と研究をつなぐ、コーディネートする場を、より多くつくり出せたらいいなと思っている。

ワールドカフェ報告「私の実践から見る多文化社会」 松尾慎さん(ファシリテーター)

「私の実践から見る多文化社会」をテーマに、参加者を 17 のグループに分けてワールドカフェを実施した。目的は、テーマに基づく各ラウンドで提示される問いに関し対話的に深めるとともに、組織や立場の違いを超え、多文化社会に関わる実践をしている関係者がオープンな心をもってつながることであった。パネルトークのゲストにも参加していただいた。

各ラウンドの問いは以下の通りである。

- 第 1 ラウンド:「専門職として、多文化社会の中での自分の役割とは何か。打開できていない課題は何か」(23 分)
- 第 2 ラウンド:この指止まれセッション(15 分)
- 第 3 ラウンド:「今後、自分自身の役割を果たすため、具体的に日々何をなしていくのか?」(20 分)

第2ラウンドはグループを組み換え、8つのグループを設定し、参加者に好きなグループを選んで入ってもらった。4つのグループは、パネルトークの4名のゲストを囲むグループであった。あと4つのグループは、テーマに基づくグループで、大まかに「地域日本語教育」、「国際交流協会」、「国籍条項と社会運動」、「基礎教育保障と夜間中学」に分かれた。第2ラウンドのグループ分けは、参加者の希望に基づいたものだったので、人数にやや偏りがみられた。

最後のセッション(全体共有)では、参加者から第1ラウンドの問いにある「専門職とは何でしょうか?そこがはっきりせず、あるいは、自分自身は専門職ではないという参加者もいたので、専門職ということばを省いての自身の役割を話し合いました」という発言もあった。今回のフォーラム、そして、ワールドカフェはこれまでに実施したフォーラムで話し合われた流れを引き受けて開催された。そのために、これまでの流れを40分程度の映像に収め、それを視聴した上で、参加いただくよう勧めた。それでもなお、参加者全員が「問い」の内容を共有することはむずかかったようである。

また、グループによっては専門職として30年以上、活動された方と大学生で構成されるところがあり、発言量にやや偏りがでたところもあったようである。それでも、対等で寛容な目線での対話が促進されている様子が見受けられた。しっかりと課題は受け止めた上で、またこうした対話の機会を持つ際には、また、「多文化社会に関わる実践をしている関係者がオープンな心をもってつながる」ことができるよう努めたいと思う。

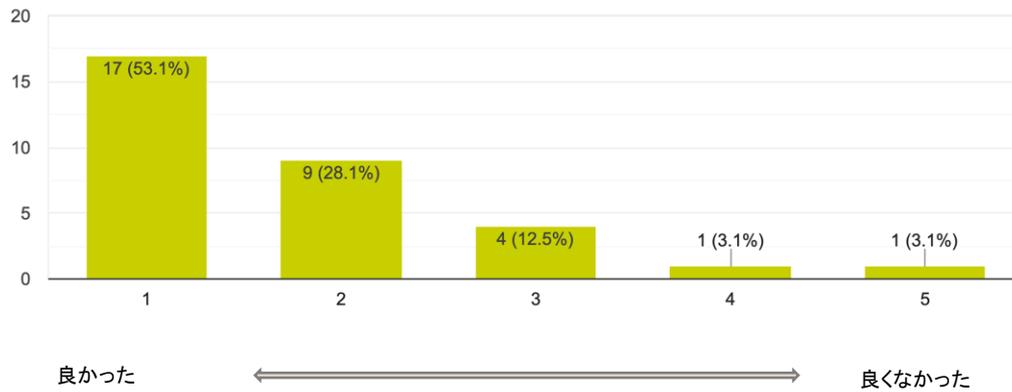
参加者アンケートの結果

回答数: 32 件

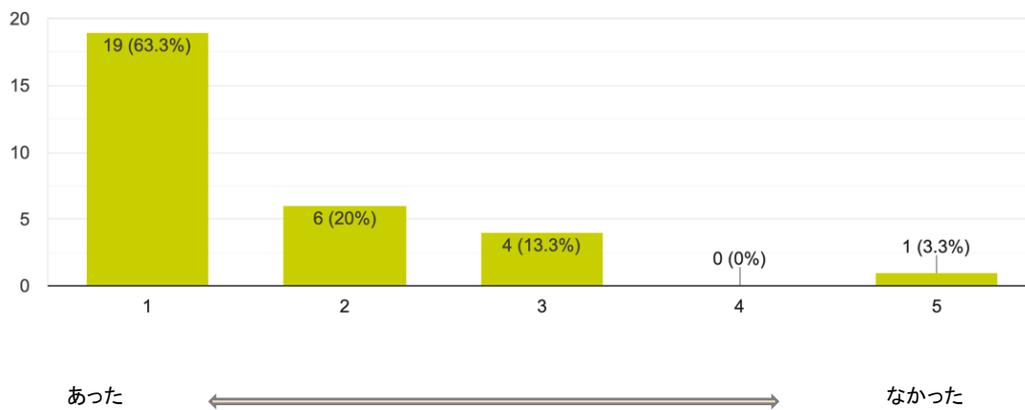
参加者の所属



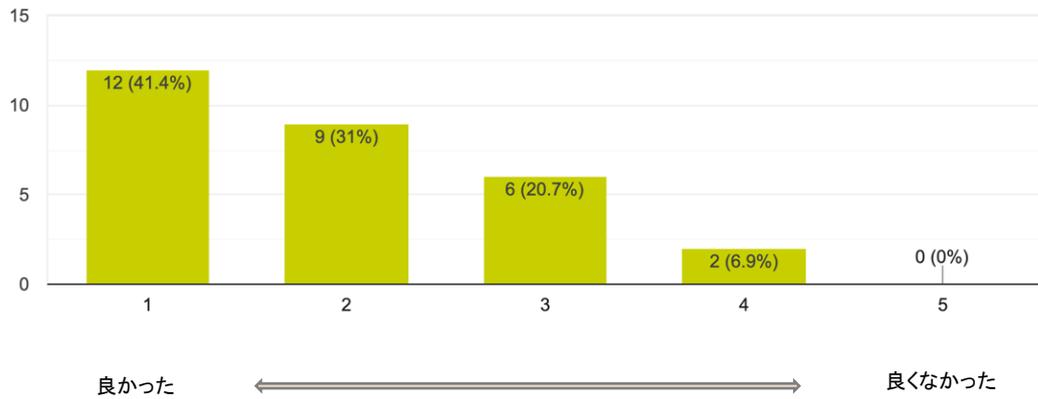
パネルトークと振り返りについて



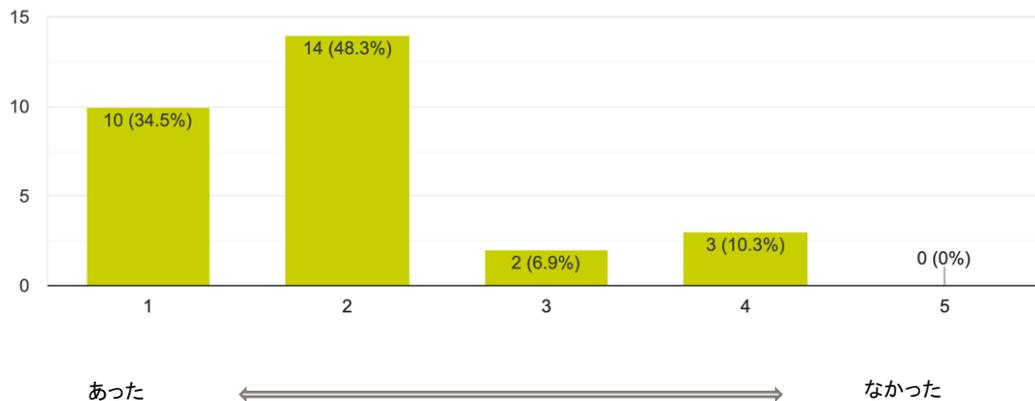
パネルトークではご自身の実践や研究との関連性や、役立つ部分がありましたか



ワールドカフェについて



ワールドカフェはご自身の実践や研究との関連性や、役立つ部分はありましたか



ご意見・ご感想(抜粋) * 原文のまま引用しています。

良かった点について

- ・ワールドカフェにて、私が研究をしているテーマと異文化共生のテーマが合致していた
- ・様々な専門分野の方のお話が聞けて良かったです。
- ・パネルトークは、4人のパネラーが異なる視角から話題提供をしてくださったことで、多文化社会の問題を複眼的に捉える視点が得られたと思います。とても気づきの多い充実したフォーラムでした。
- ・初めて参加しましたが色々な方の話が聞け、またワールドカフェでは話しやすい雰囲気、有意義な時間でした。
- ・発言する機会が多くあってよかった。
- ・大変刺激を受けました。大勢の仲間がいることに勇気づけられました。また自分が進んでいる方向が間違っていないことを確認することができました。
- ・初めてでしたが、学術的すぎず、身近なところから多文化共生を考えられる会でした。
- ・日本語教育に関心があるのですが、その他の分野にもつながりがあることをあらためて考え、今後に活かしたいです。
- ・普段の自分の活動について客観的に捉えることができ頭の中がすっきりしました。

- ・事前動画が大変参考になりました。
- ・「専門職」という言葉の理解が、私自身もよくわかっていなかったのと、参加後に気づきました。特定の職だけが多文化社会実現のための専門職であると捉えていた気がします。(HPなどに書かれていたのかもしれませんがね。私の単なる見落としていたらすいません。)ただ、会を通して、自分自身が多文化社会とどうか関わることができるのかを考える良い機会になりました。発表者や参加者の皆様の熱意も伝わってきて、前に進む勇気もいただきました。
- ・参加して本当によかったと思っています。パネラーの方々のお話はもちろんですが、ワールドカフェで一緒にさせていただいた方にうまく話を引き出していただいたり、自分の地域外で起こっていることをローカライズして考えるきっかけをいただきました。他のグループのことはわかりませんが、このグループセッションで得たことはとても大きいです。
- ・多文化共生に興味のある人が活発に意見や情報交換をする場に参加でき、私もさらに学んでみたいと思えた楽しいフォーラムでした。

改善点について

- ・全体会の中で林さんが述べていたように、「専門職を問う」と言った時の「専門職」が何を指すのかが曖昧なまま、ワールドカフェに入ったため、グループによっては議論を進めるのが少し難しかったかもしれません。
- ・パネルトークからワールドカフェに移る際の休憩時間は、5分以上確保した方がよかったと思います。進行が押し気味になりますが、カフェ内で時間を調整する手をあつたと思いました。
- ・パネル討議の時間をもう少し増やし、ワールドカフェの時間をもう少し減らした方がよかった。また、ワールドカフェも少し細切れになった感じがする。
- ・最初のブレイクアウトルームの人数はもう少し多くてもいいような気がしました。また、関係者の方が一人入ってくださると、開始までの戸惑う時間が少なくなったのではないかと感じました。
- ・突然の通信トラブルにより参加できず大変残念でした。必須の質問にはベストのところにチェックしてあります。再視聴の機会があればうれしいです。
- ・もう少しディスカッションの時間が欲しかったです。

多文化社会専門職機構へ期待すること

- ・問題提起をした上、問題解決の手段、または方法の事例を発表する機会などどうだろうか
- ・情報提供
- ・また、今回のような企画を計画いただければ幸いです。
- ・多文化共生の第2ステージに向けて機構とタブマネ協議会が共にどこに向かっていくのかについて、出口戦略を模索すべき時だ。今後はその方向性の中で外国人の次世代を巻き込んだ活動に舵を切ることが肝要であり、全国的に多文化共生の枠組みを大衆化する仕組み作りに取りかかる必要性を感じる。
- ・専門職を重層的に定義していくことが生産的ではないかと感じました。
- ・多くの方が関心を持って、関わって、よりよい社会になるため、役に立つことを期待しております。
- ・アカデミックとプラクティカルのちょうど中間部分にたち、まさに今回の話題にあがったような公・共・私の橋渡しをしてくださっていると思います。これからも様々な研修会に参加させていただきたいと思えます。

企画

企画会議 * 全てオンラインで開催

2021 年
8 月 4 日
8 月 17 日
9 月 7 日
9 月 21 日
10 月 13 日
11 月 2 日
11 月 19 日
11 月 29 日

企画メンバー * 運営委員および理事

菊池哲佳、高柳香代、長尾晴香、新居みどり、松岡真理恵、松尾慎、奈良雅美

企画メンバーの振り返り

- テーマの切り口が狭いため、テーマの設定とターゲティングを明確にできればよかった。
- 理事を企画から巻き込んで、企画の趣旨の理解、周知に務める必要があった。
- 時間面でかなりタイトだったので、ワールドカフェは別途に実施したほうがよかっただろう。
- ワールドカフェ自体の時間はちょうどよかった。
- 会員間のワールドカフェを総会時に実施しても良いかもしれない。

以上

報告まとめ: 奈良雅美
2022 年 3 月